

『自由と民主主義をもうやめる』（第四章・第五章レジュメ）

平成21年5月30日

報告者 嶋田 研志郎

第四章 漂流する日本的価値

○世界金融危機の根本原因は過剰資本

- ・ サブプライムローンを引き金とする金融危機
→様々な市場で起こるミニバブル

○アメリカの北部型経済と南部型経済

- ・ 北部の特徴→製造業中心、民主党、福祉や権利保護重視、消費拡大
- ・ 南部の特徴→一次産品（石油や農業）中心、共和党、独立自営、コスト削減
- ・ 70年代までは北部主導、しかし製造業の衰退とともに南部の見直し

○グローバリズムはアメリカ国内事情の産物

- ・ 製造業の海外移転→国内製造業の衰退（北部の凋落）
- ・ 東部の金融サービス業（ウォール街）や西部のITベンチャー（シリコンヴァレー）
→南部との共通点は自由主義的、市場中心的で政府の規制を嫌う
→規制を嫌う故に必然的にボーダレス化していく
→80年代のグローバル化の始まり

○「協議」などではなかった日米構造協議

- ・ 世界のマーケットを牛耳るために世界をIT・金融に巻き込んだアメリカ
- ・ 日米構造協議＝S I I（Structural Impediments Initiative）
→Initiative＝主導権 アメリカ主導の日本の構造改革
詳しくは関岡俊之『拒否できない日本』（文春新書）を参考

○市場化が抑制されてきた、資本・労働・資源

- ・ 生産要素である資本・労働・資源
→生産の上で必要な要素であり、政府により管理、調整されていた

○世界中が投機経済に呑み込まれた

- ・ 金融市場、労働市場、石油や食料等の先物市場の投機
→ものを売ると比べものにならない利益率
- ・ 労働力、資本力、資源を持つ国がグローバリズムの中で影響力を持つ

○ドバイの現世主義とニヒリズム

- ・ 不動産バブルに沸くドバイ（まるで砂上の楼閣）
→そのバブルを演出する実業家の砂漠への愛着

○日本の強みだった「組織の力」

- ・ 資本、労働、資源のない日本の強み「組織の力」
→組織の中で自分の能力を生かす勤勉さ
→その組織の継続が力だった

○組織の商品化がもたらした破壊的影響

- ・ M&Aや買収の横行→優先すべきは商品価値

○すでに緩やかな戦争が始まっている

- ・ 歴史上のグローバリズムの時代
 - ① 16世紀から17世紀、覇権も次から次へと入れ替わりヨーロッパ社会は大混乱
 - ② 19世紀から20世紀初め 二つの大戦へと行きつく
→日本は2番目のグローバル化波が押し寄せてきた時代に開国し飛び込んで行った

○帝国主義の時代に問われる国力

- ・ ジョン・グレイの予見→世界は帝国主義の時代を迎える
 - ◎自由と民主主義の普遍化を軍事力で行うアメリカ
 - ◎経済力、共産党の政治力、歴史、文化の力を結集して世界に影響を及ぼす中国
 - ◎資源力と軍事、政治力を背景に覇権主義的な強いロシア
- ・ その中で打ち出すべき日本の価値観・国力とは??

○日本が発信すべき文化・価値の力とは

- ・ 四つの国力の要素
→政治力・軍事力・経済力・文化の力もしくは価値の力

- ・ すべての要素の根底には文化・価値の力が重要
- ・ グローバリズムの中で自らのアイデンティティを求める運動の活発化
→日本も静かな確信としてのアイデンティティが必要である
- 「アメリカ的なもの」への精神的従属
 - ・ アメリカが道徳的に正しい「父」
→あの戦争（太平洋戦争、大東亜戦争）に負けたのは道義的に日本が誤っていたから
→「日本的なもの」の肝心なところが骨抜きになった（詳しくは第5章で）
- 「清く明き心」という宗教観
 - ・ 日本人の美意識をたどる必要性→日本人の労働観も同じ
 - ・ 悉有仏性、清明心→汚れは労働によってこそ取り戻すことができる
- 日本に資本主義を生んだ勤労観
 - ・ 信仰の証として勤勉に働き財をなす（ピューリタニズム）→資本主義
 - ・ 日本においては石田梅岩の「商人道」→一人一人が欲や虚栄心をなくし与えられた職分を全うすること→皆が勤勉に働く
- 無私に働くことでよき秩序を保つ
 - ・ 神を前提とするキリスト教⇔人間の「性」を目指す
個人主義、競争、孤独、罪の意識 無私、秩序を保つ、一体化、素直に生きる
- 日本の精神を表す言葉は翻訳できない
 - ・ 相良亨「理」「自然」「道」「天」「心」
 - ・ 新渡戸稲造も苦勞→日本の精神が近代社会で有利に働かなかったのも理由の一つ
- 「武士道」が記憶から消えることはない
 - ・ 新渡戸稲造の時代でも消えかかっていた→しかし、消えることはない
 - ・ 伝統は再発見され、創造されていくもの→伝統を伝達していくこと

第五章 日本を愛して生きるということ

一 なぜ今、「愛国心」なのか

- 日本特有の「独自性」にどう踏み込むか

- ・ ナショナリズムを一般論で議論してもつまらない
→ナショナリズムは常に特定の国に向けられるもの
 - ・ 「日本の愛国心」には「独自性」があるのではないか
 - ・ 愛国心を議論することは難しい→対象である「日本」を簡単に定義できない
→それが出来なければ愛国心を主題に取り上げることもできない。
- 「国に対する責任」がなさすぎる
- ・ 日本に対する危機感
→アメリカや中国、ロシアに振り回され、国内では一貫性のない投票
 - ・ 民主主義に必要なはっきりとした国民の意思
→ある程度共有されるべき「国に対する責任」もない→愛国心を論ずるべき
- 自国に誇りを感じない日本人
- ・ 世界的にも自国への意識の低い日本人
- ・ 右翼の街宣車的な愛国心とは違う、一人一人の心の中にある愛国心
→① 愛国心のいくつかの定義
- ③ ② 戦後日本の愛国心
- ④ ③歴史観
- ⑤ ④ 近代日本の歴史
- 以上を振り返って、日本の愛国心を考える

二 「愛国心」をめぐる諸概念

- 「国」という場合の二つの意味
- ・ ステイトとネイション
- ナショナリズムとステイティズム
- ・ 共通の文化や価値観のもとに結束する国民を大切にする「ナショナリズム」
 - ・ 海外の脅威に対抗するために政府や国家の権力を強めるのは「ステイティズム」
- 「郷土愛」の延長にある「愛国心」
- ・ パトリオティズムの二つの側面
 - ① 国への愛着→愛国心、ナショナリズムに近づく
 - ②郷土愛のレベル→リージョナリズムぐらいのニュアンスになる
この違いを意識しないと、意味がぶれてしまう

三 「戦後」をめぐる二つの見方

- 左翼思想のカリスマ、丸山真男
 - ・ 「愛国心・ナショナリズム」は「自由・民主主義・平和」の敵
 - 典型的な形で表明したのが丸山真男
 - ・ 権威を否定しながらも、自らが権威になってしまった

- 戦争の原因は天皇主権にあった
 - ・ 丸山論「日本の天皇制は二つの役割を果たす」
 - 政治的中心であり、日本の文化的伝統的象徴→西洋近代国家の君主は価値中立的
 - ・ 天皇に反対することができなくなった→民主主義が成熟していなかった

- 天皇国家だから戦争を起こしたのではない
 - ・ 丸山の理論が生み出した「進歩的文化人」
 - ・ 丸山の理論では説明しきれない疑問
 - 戦前も議会は運営されていた、ナチスやイタリアはどうなるのか
 - 戦後の知識人は感情的に丸山の理論に納得してしまった

- 戦後社会は「悔恨の共同体」
 - ・ 戦争を止めきれなかった「悔恨」が戦後平和主義を正当化し、堅固にする（丸山論）

- 吉田満『戦艦大和ノ最期』
- 自分たちだけが生き残ってしまった負い目
 - ・ 大和の乗組員だった吉田満
 - あの戦争のいい、悪いではなく、身代わりとして死者たちの言葉を伝える
 - 共に闘い死んでいった戦友への負い目

- 戦没学生は戦後日本に何を思うのか
 - ・ 平和や繁栄に喜びながらも、その根底の自己中心主義的な考えには不毛であると訴える